って現われたこと．②進学率の上昇により若年層の有配偶率が低下したこと．③スペーシング（出産間隔の調整）により有配偶出生率の低下したこと等による．しかし，普通出生率，年齢別出生率等は低下したとはいえ，完結出生児数は変化していないことから出生力の基調そのものがそれほど大きく変化していないものと見られる．

それ故に，単に女子の年齢別出生率を基礎にするのではなく，結婚確率，年齢別有配偶率，結婚年齢・結婚持続期間別有配偶出生率にまで分解し，出生力動向を検討する必要がある．

(2) 今後の研究課題

出生力動向については，今後さらに精密な分析を続けていく必要がある．

その際，基本的な動向を的確にはあくするためには，出来るかぎり精細なモデルを構築することが第1の要件であり，それとともに，第2にモデルを実証的に検討するに必要な統計データが収集されなければならない．

モデルについては人口学的要因を出来るかぎり基本的要因に分解し，しかるのち，経済的社会的要因との関連を考える方向が望ましい．

統計データについては，既存の静態統計，動態統計の解析ばかりでなく，これらの調査で欠けている出生行動に関する実態と意識をとらえるために出産力調査など精密な実地調査を定期的に実施する必要がある．

日本統計学会第48回大会

昭和55年度の日本統計学会（会長・米沢治文）総会および研究報告会は，9月10日（水）から12日（金）までの3日間にわたり，早稲田大学（東京都新宿区）において開催された．

本年度の研究報告会においては，三つの共通テーマ（大学における統計教育の現状と問題点，人口変動の統計的分析，および用量―反応曲線とその周辺）が取り上げられ，活発な討論が行なわれた．とくにわれわれの関心を呼ぶ「人口変動の統計的分析」に関する報告は次の3題であった（座長：慶応大・安川正彬）．

人口変動の統計的計測について……高木　尚文（帝京大経）

人口学的シミュレーション・モデルによる1960年以降のわが国出生変動の解析……伊藤　達也（人口問題研）
山本　千鶴子（　〃　）

ロジャーズモデルによる日本地域人口の解析……黒田　俊夫（日本大経）
岡崎　陽一（人口問題研）
南条　善治（福島医大）
鈴木　啓祐（流通経済大）
大塚　友美（日本大経）

指定討論……河野　稠果（人口問題研）
仮谷　太一（川崎医大）

なお，一般研究報告中，人口に関連のある報告を挙げてみると次のようなものである．

商圏人口の推定をめぐって……新家　健清（福島大経）

月別出生の性比の説明……臼井竹次郎ほか（公衆衛生院）

x歳以上長寿者の性比……川上　理一（公衆衛生院）

明治32年以降における日本の低年齢人口の死亡現象に関する研究（その2）……飯淵　康雄（琉球大保健）

我が国の癌死亡の構造的解析……内藤雅子ほか（東京大医）

（山口喜一記）